

同志社大学のPBL

プロジェクト学習とポートフォリオ(2)

同志社大学文学部教授 山田 和人

ネットワーク型 デジタルポートフォリオ

ここで言うポートフォリオは、学習者がプロジェクト活動に取り組んだすべての時間とタスクの記録のことを意味する。たとえば、自分自身の活動日誌、メンバー間の電話やメールのやり取り、お互いの記録に対するコメントつけ、企画書や調査報告書の作成、議事録の作成、調査の日程調整や準備等すべてを含めた活動の履歴である。

ポートフォリオの中で一番重要なのは、活動日誌である。毎日の活動をできるだけ詳細に記録にとどめていく。書式はシンプルながらもっともよい。一週間単位の活動日誌でも構わない。わたしは、下のような週間ジャーナルシートを使っている(図1)。

こうした書式のファイルをあらかじめ掲示板形式のサイトにアップしておき、各自がダウンロードして使えるようにしている。

週間ジャーナル

年 月 日提出	
チーム名	
氏名	学生ID
期間 (から までの間を活動期間とします) 年 月 日 () ~ 年 月 日 ()	
目標 (自分がこの1週間、どんな目標を立てて取り組んだかを書きます)	
担当 (どんな課題・役割・使命が与えられたかを書きます)	
活動記録 (個人およびチームでのミーティング・調べもの他、メンバー間の電話、メールなどのやりとりも含めて記載) 注) 改行すれば、日時・内容・感想欄も、自動的に行数は増えていきます。	
日時	内容
感想 (この期間の自分自身とチームの活動をふりかえりましょう)	

図1 週間ジャーナル書式

自分が一週間のうちに取り組んだ内容を整理して、活動日誌にまとめ、一週間単位で自分の学習を振り返るようにする。自分の振り返りが、おのずとチームとしての振り返りに

もなっていく点は注目される。自分のチーム内での役割の意識化という面でも大きな効果がある。
学習者は、このファイルを掲示板形式のサ

イトにアップする。アップされた活動日誌に対してチームのメンバーがコメントを寄せる。ともかく、「一言コメント」をつけるということをごろがけるように伝えている。
活動日誌を習慣化するために、最初の1カ月はアップロードを義務付けている。こうした活動日誌をつけるという経験を持たない学生がほとんどであり、動機付けと意識付けのためにも当初はなかば強制的に実施することが必要である。

その間に、こうした記録の重要性について、さまざまな事例を紹介しながらレクチャーしていくことも大切である。一月半が経過する頃から、しだいに日誌をつけることがチームワークを育み、メンバー同士が学び合うきっかけの役割を果たしていることに学習者が気づき始める。やはり、最初の習慣化のための義務付けを適切に行なえるかがきわめて重要である。

この週間ジャーナルの書式をアップする時に次のような説明文を掲載している。

週間ジャーナルの書式をアップロードします。この書式で週間ジャーナルを毎週一回提出してもらいます。チームごとにアップロードしてもらいますが、ほかのメンバーの活動についてもコメントをつけるようにしてください。

さらに、ほかのチームの活動についてもコメントをつけて、お互いの意見交換ができることさらにすばらしいと思います。せつ

かくジャーナルをアップしても、フィードバックがないのはさびしいですから。すばらしい成果をあげるチームは、週間ジャーナルや調べた結果をお互いに共有できているという傾向があります。
チーム学習は、個人学習とは異なり、メンバーがお互いに知識や情報を共有して、共に学んでいく姿勢に支えられています。学び合う喜びをみなさんに体験してもらいたいと念願しています。

アップされた活動日誌に対して寄せられるチームのメンバーからのコメントが、自分の活動に対するフィードバックになっており、それが自分の励みになるとともに、チームの一員であるという帰属意識を高めることになる。担当者からのコメント以上に、フィードバックの効果が高い。

そして、困難な状況に直面した時に、この活動日誌を読み返すと、まさに何が問題であったのかを、自分で発見することができる。こうした経験を持つと、自分自身をモニタリングする必要性と問題解決の手法を自分なりに見つける喜びを感じるようになる。

デジタルポートフォリオには、複雑なシステムは必要ない。ただし、ワード、エクセル、パワーポイント、PDF、JPG、HTML等のファイルを添付できる機能はあった方が望ましい。あとは、掲示板機能で、スレッドに対してコメントがつけられれば、それで最低限のデジタルポートフォリオのシステムで

SNS型 デジタルポートフォリオ

同志社大学のプロジェクト科目では、SNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)型のPBL支援システムCNS(コミュニティー・ネットワークキング・サービス)を立ち上げて運用している。個人の学習とチームの学びを統合したコミュニティの場としてプロジェクトをとらえ、プロジェクトの遂行プロセスを支援するとともに、コミュニティの形成を支援しようと試みている。「個」の力を育む「チーム」の力、「チーム」の力を引き出す「個」の力が、プロジェクトの遂行とコミュニティの形成のプロセスにおいて醸成されてくることを提案している。

SNSといえば、ミクシイが代表的なエンターテインメント系SNSとして普及しているが、CNSはアカデミック系のSNSと言える。前者が興味と趣味を共有していくことでコミュニティを生み出し、ネットワークの拡張を目指すことでつながっていくのに対して、後者は、コミュニティそのものを深化させることで、チームワークを強化し、プロジェクトを推進していくことでつながっていく。

CNS (Communication Networking Service) システムの概要



図2 CNS

前者では、コミュニティがネットワークの拡大のための手段であるのに対して、後者では、コミュニティが、プロジェクトを推進していくための母胎として、現在進行形で成長し続けていく。

CNSは、マイページとコミュニティページで構成されており、マイページは、プロフィール紹介で個人目標や自分のスキルを提示するとともにプロジェクト活動にかかわる個人学習の成果を伝える役割を果たしている。メッ

ページ、ジャーナル、ウェルカムログ（足あと）等の機能がある。

コミュニティページは、科目のコミュニティであり、プロジェクトを推進していく上で不可欠な情報共有と時間管理等を支援するために、カレンダー機能、タスク機能、データバンク、メッセージ、ジャーナル、ミーティングボード、ウェルカムログ等のツール・機能を提供している。いわば、個人学習とチーム学習が統合された学習支援ツールであり、プロジェクトの特性を踏まえた学びの支援を行っている（図2）。

マイページには、マイフレンド申請ができるようになっており、自分たちのプロジェクトメンバーだけでなく、他のプロジェクトメンバーとの交流を促すように配慮されている。

CNSでは、ウェルカムログも、コメントをしないメンバーのプロジェクトに対する関心を探る手がかりとして機能することになり、コミュニケーションツールとして有効な役割を果たしている。

前述した活動日誌に相当するのがジャーナルである。CNSにおいても、学生の学習履歴を記録し、自ら振り返る機会を設けるようにしている。日々の活動に対するリフレクション（振り返り）が学習者に自分自身を客観的に振り返る習慣を身に付けさせることになると考えている。

このジャーナルは、パーソナルなポートフォリオではなく、メンバーに対して公開されて

おり、自分の活動が常にメンバーに見えている。そのために、ジャーナルに対するコメントが、お互いの活動のフィードバックになっており、そのコメントが信頼や期待となり、学生に自信と責任を自覚させるきっかけになる。

こうしたリフレクションとフィードバックを受けると、自らの学びを客観的に点検・評価することができるようになる。それと同時に自分の進むべき方向を見失うことなく、プロジェクトに関わることができるようになるのが大きな教育効果である。学生同士がお互いに学びあう同期同調型の協調学習になっている。

このジャーナルが、デジタルポートフォリオになっているために、いつでも全文検索ができ、自分の気づきを歴史的に振り返ることを容易にしている。時系列的に表示されるようになっているので、いつどのようにして、その気づきもたらされたのかをすぐに確認できるので、振り返りの機会を増やす効果もある。

このようにCNSに見られるようなプロジェクト活動に関するさまざまな記録が、個人とチームのポートフォリオになっている。

こうして学習者が主体的に作成したポートフォリオは、プロジェクト学習のプロセス評価における最も信頼できるデータになる。それは、個人とチームが自らの成長のプロセスを振り返るかけがえのない記録であり、歴史そのものになっていく。